

戦時下に描かれた絵画(3)

[吉田博の絵画技法研究(1) / 記録絵画の保存と修復]



Fig.1 「急降下爆撃」キャンバス／油彩 吉田博

はじめに

弊社の修復工房では前回、日中戦争の舞台を描いた作者不詳「弾痕光華門外」、また前々回は戦前戦中また戦後と活躍した女性画家、長谷川春子作「少婦国防」と戦時下に描かれた作品をテーマに修復と研究をおこなってきた。戦後、昭和から平成となり先の戦争から半世紀を優に越え現在、戦争を体験した世代はもとより、その証言や記録また表現した写真や映像もますます稀少となり当時をそのまま描き残した絵画による記録も、より貴重な存在となりつつある。今回の発表も民間に人知れずとり残された「昭和の文化財」となる戦時下に制作された芸術や資料絵画を後世に残すという目的のもとにおこなった2回にわたる研究発表の継続となった。

3回目の今回は明治期から昭和の時代に活躍した洋画家である吉田博が従軍した際に制作した油画「急降下爆弾」(Fig.1)をテーマに作品の修復と光学的な観察による技法調査をおこなった。明治9年に生まれ、若くして中川八郎とともに渡米、デトロイト、ボストンなどの美術館での作品の発表を皮切りに、欧米で画業を磨き風景画家として世界で知られる画家として油画や版画など数多くの作品を残した。今研究では、戦時下に描かれた戦後未発表の絵画作品の発表であり吉田博の油画の技法の調査と研究の先駆けとなり、その第1回として戦争の記録いわゆる戦争画の修復と研究をおこなう機会となった。このたびはご遺族の全面的なご協力により中国大陸で描いた多くの未発表の作品や、従軍カメラマンさながらに撮影した写真も数多くを拝見することができた。吉田博は山岳画家としても世界の名だたる名峰を始め、富士山、アルプス、剣岳など登り描いた画家であるが、従軍時代は自ら戦闘機に乗り込み曲芸飛行も体験している。「画家は自分が描いているものを感じなければならない」という心情を持ち、当該作品では、数多く描かれた静かな山々を描いた風景ではなく、旋回する戦闘機とともに棚引く雲を上空から俯瞰して捉え、ダイナミックに表現した作品だ。当時の国策に乗じた形の絵画制作にも作家の心情を伺い知る事の出来る貴重な作品の研究となった。

本論では、当該作品を描いた晩年の吉田博の周辺や作品に対しおこなった側光線や赤外線不可視放射による観察、また絵具のクロスセクションによる断層観察などをもとに、作画の特質に言及した。また油画のみならず自ら撮影した兵士の写真をもとに、忠実に描き起こした

水彩画も制作の過程を研究するための参考に表した。水彩画では油画の下描き以上に、鉛筆による素描の巧みな描写が遺憾無く発揮されている。これらの考察とともに、戦時下に描かれた絵画を紹介する機会とし、同時に後世へと保存するための修復処置の記録とした。

1. 吉田博の画業と従軍絵画

1. 吉田博の画業と従軍

吉田博の画業は、水彩画・油彩画を中心に制作し続けた前半期と、浮世絵に見るような高度な技術を取り入れた木版画の企画と制作に費やした後半期とに分けることができる。40歳を過ぎて木版画に着手した吉田博は、洋画の技法、色彩を充分取り入れながら新しい木版画の創造活動をはじめた。自らも版画の修行をするのみならず彫師、摺師を監修しプロデュースするという企画制作というものだった。吉田博の作品の殆どは風景画だったが、

アメリカ、ヨーロッパの各地、アフリカ、インド、東南アジア、中国、韓国など世界中取材した。また登山家でもあったことから日本山岳画協会を結成した博は、アルプス、日本アルプス、富士、槍ヶ岳など世界の諸山を題材とした風景画を描き残した。

その後、従軍した晩年、60歳代となる時代も精力的に作品を発表している。昭和13年から15年（1938年から1940年）に陸軍省囑託従軍画家として中国に派遣され武漢の南方から岳陽、揚子江へと、さらに上海、蘇州などに赴き、さまざまな戦時記録、絵画を描いている。

当時、第34回太平洋画会展では「大城大沼」を出品、そして日本山岳協会第三回展に、また第二回新文展では「三千里」、かねてから取り組んでいる版画の日本風景版画なども精力的に発表している。その頃、所属していた太平洋洋画会では佐々貴義雄も昭和13年の同年に従軍している。昭和14年には、「吉田博・佐々貴義雄 従軍写生展」が開催、「安慶荷揚場」など69点を出品。吉田博は、カメラと画材を携え日本軍の基地周辺の風景や偵察の様子、また雄大な風景画や戦闘風景も数多く残している。従軍の成果として制作した作品は、太平洋画会や新文展などに出品された。当該作品も第四回新文展（文部省美術展覧会）に出品された記録が残されている。昭和18年以降、67

才を過ぎた吉田博は外地に赴くことはなく勤労者の労働風景や製鉄工場の溶鉱炉(Fig.5)など、国策に応じた作品を描き、国政や国策に協力していた。

2. 従軍絵画の制作方法

吉田家ご遺族にて保管されていた従軍時の絵画は、紙に描かれた水彩、カンバスに描かれた油彩画など大きさは様々であるが、実際に現場で描いた作品と帰国等してから描いたものなどさまざま。現場で描いた作品には、制作方法に特徴があるようだ。特のカンバス画などは木枠に張った状態で描いたのではなく、描いてから作品を持ち帰るために工夫した跡が見られる。カンバスの周囲には、タックスホールとは別の穴があいている (Fig.2)。これはボードにキャンバスを貼った跡と観ることができる。カンバスの角には画面寸法に記した鉛筆の線があり、その中に描いているが、部分的にはみ出して描いたりもしている。描き終わると作品を丸めて持ち帰ったのではないかと考えられる。従軍時の制作にかぎったことではないが、不測の事態に備え、また荷物の軽量化ということもあり、このような方法をとったのではないかとと思われる。また携帯したと言われているカメラで撮影した写真をもとに正確に描き起こした珍しい作例もある (Fig.3~4)

2. 油画「急降下爆撃」の状態と技法

1. 「急降下爆撃」組成と状態

作品の寸法は、1370×1080mm で木枠から外され、板に挟まれて保管されていた。木枠から外された事で麻布は著しく波打ち状の歪みが発生していた。さらに麻布には折れたような跡もある。カンバス地塗りには、白色の塗料があらかじめ塗られている。カンバスの縁部分にはタックスで張った穴が観られる。画面の絵具層には亀裂の発生や絵具の浮き上がり等の症状も確認できる。さらに画面全体に塵埃が付着し、原画の色調を著しく暗くし、歪めている。

2. 肉眼観察と光学調査による描画手順の所見

作品は、麻布に白色で油性の地塗りのされたキャンバスに、油絵具を筆により描いている。作品の概観は、素早い筆の運びと、紫がかかった灰色と赤系の色彩がふんだんに使用され、戦争に関わる作品にしては明るい印象で、いわゆる印象派に見られるような淡色で表現されている。肉眼と赤外線による観察ではさまざまな部分に鉛筆による下描きの描線が確認でき、鉛筆の線に従って実際に油絵具によって描画を進めながら修正し、構図を決定してゆく作画のプロセスを見て取ることができる。それらは、中央の戦闘機の翼に下描きの鉛筆の線 (Fig.13~14) にも確認することができる。また 2 機の戦闘機の垂直尾翼部分を側光線により観察すると、描かれた尾翼の下には、当初描いたと見られる尾翼の形態がやや左側に描かれていた事が分かる。(Fig.7~8) 尾翼の形態を決定する事で、飛行機の翼の角度も自ずと決まる事から、飛行機が対角線を割るようなこの大胆な作品の構成を描きながら慎重に決めている。さらに数カ所から採取したクロスセクションの観察では、地上に描かれた川の緑色、街並を表現した暖色や淡青灰色、雲の灰色などの、それぞれ風景の中の固有の色を、白い地塗りの上に直に彩色している様子が分かる (Fig.9~12)。以上のことから、いわゆる印象派の作例に観られるような淡青、紫、灰色などを主体にした色相で描かれており、水彩画を描くように鉛筆による素描のあと手早く慎重に、絵具で塗りまた形態の変更は、絵具の乾燥後に更に塗りつぶしながら修正し描いている様子を見ることができる。

3. 作品の状態と修復

当初、木枠から外されて保管され、特に、画面左上方には、著しく波打ち状にキャンバスが歪んだ状態でボードに挟まれていた。作品は絵具の浮き上がりや剥落もあり、さらに著しく汚れが蓄積した状態で画面の色調を歪めていた。修復では、絵具の状態を剥落止めなど、接着処置により安定させ歪みを修整した後、木枠に張込む事で安定した形状を保っている。張込む際には、キャンバスの縁部分に麻布を貼り、裏打ち (ストリップライニング) をおこない支持体を補強した。その後、欠損部分に充てん補彩をおこない、著しく低下した色価を調整しワニ

スを塗布した。

4. まとめ

3 回目となった戦時下に描かれた絵画の保存修復は、吉田博の油彩画技法研究の第一歩となった。当時描かれた大作の油画や、多彩な水彩や素描は、戦時下の絵画ということもあり、公開される事も無くご遺族のもとで静かに保管されていた。今回の吉田博の第一回目の技法研究とはいえ、晩年に描かれた大作という事では吉田博の洋画の技法を集大成した技術的に完成期の熟達した油画技法を観ることができる。鉛筆による下描きの上に、手早くむだのない油彩の筆致で描いた当該作品は、より念の入った素描の下描きに彩色した淡彩や水彩画 (Fig.3~4) をみても、その素描力を容易に理解することができる。それらの描写や構成力は吉田博の後半期に結実した版画の世界にもうかがい知る事が容易だ。当該作品では吉田博の貴重な戦争絵画や記録的な絵画と言うこともできるが、同時に吉田博の「描いているものを感じなければ～」の姿勢が極めて強く感じられ、晩年の技量を推し量るための貴重な資料と言うこともできる。ご遺族の保管されていた従軍時の作品は昭和史、また絵画資料的な観点からも非常に貴重なものであるとえる。

学会での発表をきっかけに、今回の吉田博作「急降下爆撃」を含む従軍絵画数十点と、この3年間に発表して来た長谷川春子「少婦国防」、作者不詳「弾痕光華門外」を含むこれらの作品は、今秋に財団法人原爆の図丸木美術館にて公開の運びとなった。

戦時下に描かれた資料や絵画は、公の施設のみならず、民間に発見される可能性も少なくはない。今後、昭和史や洋画史の研究において、発見された資料には戸籍を与えるべく保存そして修復の研究発表の機会をもち、資料化することがたいせつだ。

以下図版資料



Fig.2 板等に貼るための穴：キャンバスの側面を観ると縁に小さな穴があいている（修復後写真）



Fig.3 吉田博により撮影された写真



Fig.4 右は写真をもとに描いた淡彩画。紙の右下に匍匐する兵士の名前が記されている。



Fig.5 吉田博作 油画「仮称 / 溶鋳炉」1162×800mm



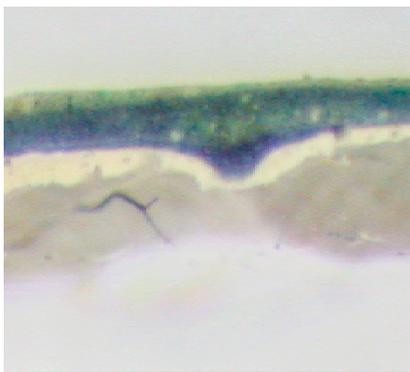
Fig.6 吉田博作油画「仮称 / 大陸の城」800×1160mm



Fig.7 画面中央 / 尾翼部分 側光線写真



Fig.8 画面中央 / 尾翼部分 側光線写真



断層觀察×50

Fig.9 画面右下方「河川」

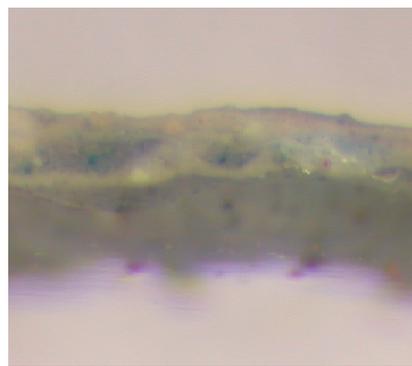


Fig.10 画面中央上方「雲」

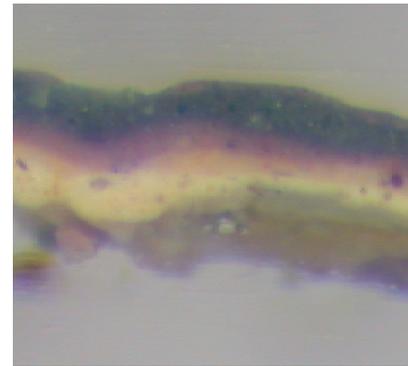


Fig.11 画面右端中央「田畑」

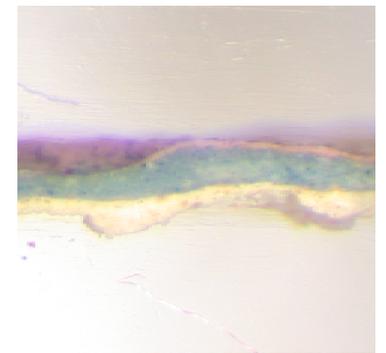


Fig.12 画面右下方「建物」



Fig.13 修復前 赤外線部分 画面中央 / 翼部分

Fig.14 修復前 赤外線部分 画面中央 / 翼部分

参考文献等：*弦書房：「山と水の画家 吉田博」2009,安永幸一,福岡 *福岡市美術館業書 4：「吉田博資料集 明治洋画新資料」2007,編集；安永幸一 / 福岡アジア美術館,福岡 *The Minneapolis Institute of Arts,A Japanese Legacy:Four Generations of Yoshida Family Artists,2002,Sandra L.Lipshultz, Minneapolis * (財)三鷹市芸術文化振興財団・三鷹市美術ギャラリー「THE YOSHIDA FAMILY 展 世界をめぐる吉田家 4 代の画家たち」カタログ 2009,富田智子,東京 *技法社「太平洋美術会百年史」1941,太平洋美術会百年史編纂委員会,東京

この度の研究では、吉田亜世美様、吉田高介様はじめご遺族の方々に多大なるご協力を賜り、ここに感謝の意を表すものでございます。また、この「戦時下」の絵画研究において常にご協力いただき、このたびの「急降下爆撃」においても貴重な資料の提供にご協力いただきました栃木県立美術館・学芸課長の小勝禮子氏にお礼を申し上げる次第でございます。